

第2回

だいにかい

こども海の文学賞

うみ

ぶんがくしょう

作品集

さくひんしゅう

父と海

ちち

うみ

私の宝物

わたし

たからもの

# 目次 もくじ

## 〈小学生の部〉

### 最優秀賞

- 「父と海」 あかしりつたいかんしょうがっこうよねん  
四年 ツダ アキラ  
「私の宝物」 わたしたちがらの  
神戸大学附属小学校三年 中林 風和

### 優秀賞

- 「砂方海水浴場と林崎松江海岸のちがい」 あかしりつはなぞのしょうがっこうごねん  
明石市立花園小学校五年 中村 幸太郎  
「世界中の海がきれいになる未来」 せかいじゅう  
おおさかしりつながよししょうがっこうごねん  
大阪市長吉小学校五年 今村 翔有  
「とりかたいろいろ」 おおさかしりつはんなんしょうがっこう  
大阪市立阪南小学校一年 立山 怜佳

### 入賞

- 「おじいちゃん和海とわたし」 あさかしりつあさかだいじゅうしょうがっこうさんねん  
朝霞市立朝霞第十小学校三年 弘山 紗菜  
「おろし売り市場ってどんな場所？」 いたみしりつおぎのしょうがっこうよねん  
伊丹市立荻野小学校四年 木元 孝亮

41 38

33 26 18

10 7

「はじめの魚さばき」  
ふね うえ さかな  
船橋市立田喜野井小学校三年 田中 佑築  
「船の上はどうして酔うの？」  
あかしりつたいかんしょうがっこうよねん やまもとしいか  
明石市立大観小学校四年 山本 椎華

せんこういんこうひょう  
〈選考委員講評〉

さいしょうはづき  
最相 葉月

たなかしん  
たなか しん

〈あとがき〉

あかし ふきゅうきょうぎかいちちょう かわさきよしあき  
明石おさかな普及協議会会長 川崎 喜昭

58

55 52

47 44

だいにかい うみ ぶんがくしょう ちゅうがくせいぶじゅしょうさくひん  
※第2回 こども海の文学賞 中学生の部の受賞作品はなし



〈小学生の部〉

しょうがくせい

ぶ





# 父と海

あかしりつたいかんしょうがっこうよねん  
明石市立大観小学校四年

## ツダアキラ

これは父の話ですが、父が生まれた石川県能登半島の小さな漁村は、町から遠く離れた寂しい場所でしたが、たくさんの魚がとれ、一年に一度大きなお祭りがあつたといひます。

父は漁師の家に生まれましたが、漁師にはならず大きな町へ進学しそのまま海のない町で働き、母と出会い僕と兄が産まれました。僕はその町で育ち小学校入学を前に明石市に移り住みました。

僕は父が漁師の息子であることを知りませんでした。

ある夏の日、家から出ない僕と父に母が少しは外に出かけるように言い、暑さが苦手で僕と父はその次の夜の夜、玄関にずっと置いてあった釣り竿を2本持ち明石の海に向かつて歩き始めました。

僕は釣りをしたいと思ったことはなく、海にでかけることもあまりありませんでした。

父にもどれぐらい釣りに出かけるのか聞きましたが、父はほとんど出かけたことがないと言い、道具は持っているが釣れたことはないようでした。実際父の持っている釣り竿は山や川などで使う淡水魚を釣るものだと言いました。僕はそんな竿で海の魚が釣れるのか聞きましたが、父は分からないが多分釣れないだろうと答えました。

父はコンビニに寄り酒としめサバを買い、しめサバを指差してこれはエサに使えるだろうかと、なぜか僕に聞き、わからないと答えると、これは使えるだろうかと今度はひとりごとを言いました。

初めて来た夜の海は暗く大きく、遠くに淡路島の光が小さく見えました。月明かりの防波堤を歩きながら、この暗い海に落ちたらどうなるのだろうと恐く思いましたが、父は僕の方を振り返りませんでした。小さい竿を持たされ、ここではこの竿



# 私の宝物

わたし  
たからもの

私は海が好きです。そして生き物も好きです。海に行つて宝物さがしをする事が大好きです。二年生までの私の海の宝物は、ツヤツヤキラキラの貝がらやパステル色のシーグラスでした。宝さがしをしていた時、とてもきれいな貝がらがたくさんあったので、大よろこびでふくろがやぶれそうなくらい入れて持つて帰つたら、なんとなんと、じつは全部生きたヤドカリだった事がありました。それはとてもビックリしたけれど、新しい事を知る事が出来たわくわくの思い出でした。

中林風和

こうべだいがくふぞくしょうがっこうさんねん  
神戸大学附属小学校三年  
なかばやし  
ふうな

ある日、宝物のシーグラスや貝がらをニヤーンとしながらおかた付けしていたら、お母さんがもつとニヤニヤニヤニヤニヤニヤとしながら

「海の宝物と言ったらやっぱり真珠でしょ。」

と言いました。そしておばあちゃんからもらった真珠のネックレスをぶらぶら見せびらかされました。私はムカツとしたけど、そのいかりはすぐに不思議にかわりました。え？と口が開いてかたまってしまうくらいビックリしてしまいました。

「なんで真珠が海なの？だって石でしょ？」

と思いました。だからお母さんに聞いてみました。

「海にいる貝が作ってくれるからよ。」

「は？どうやって貝が作るわけ？」

私は、いつも食べている貝が一生けん命たいて丸めてどろ団子を作っているところを想像してしまいました。もつとビックリです。今度は目が点になるほどでした。

「え？どうやってどうやってどうやって！」

お母さんにまた聞いてみたら

「貝から真珠を取り出す体けんが出来るところがあるよ。」

と教えてくれました。しかも

「やった事あるじゃん。」

と言われました。私はその事をすっかりわすれていました。だってそれは三才くらいの時の事だからです。

「どこでやったの？」

と聞きました。またやりたかったからです。

「いせ神宮行った時だよ。」

と言われました。

「ぜつ対またやる。やりたいやりたい！」

と私は言いました。だけどお母さんは

「遠いからそうかんたんには行けないなあ。」

と言いました。私はあきらめかけていました。

それからしばらくして、北野のい人館に行きました。道を歩いている時

「ここら辺はパールストリートって言うらしいよ。」

私はピンと来ました。もしやそのパールって、真珠では？そして私は見つけて

しまいました。そのお店を！

「あこや真珠貝取り出し体けん出来ます。」

私はネックレスをもらえないかわりに、

「お土産はいらさないから、おねがーい。」  
とおねだりしてやらせてもらいました。

あこや貝は想ぞうい上に大きくて食べた事のない貝でした。表面がざらざらして、魚みtainなにおいが生ぐさかつたです。真珠は貝が手を外に出してお団子を作るのではなく貝の体の中で作るんだと教えてもらいました。私はおなかいくならないのかと心配しました。でも真珠が早くほしかったので、急いで作業を開始しました。まず貝の二まいのからを開きます。手でパカッと開けると思っていたら大まちがいでした。コンクリートで固められているかと思いきや開けられませんでした。だからナイフを使って二まいの貝の間にぐいとさしこみ、ぐいぐいと一回転させて、やつと開きました。

「やつと私の真珠に会える！」  
と思つたら

「カパッあれ？ ない！ ないないどこ！」  
あせつて貝のお肉をほりかえしてみたら

「コッ。」  
ナイフがなにかに当たりました。ナイフをぬくと一しよに真珠がとび出して来ました。

「きれい！魔法みたい。」

その真珠は白くて、ツヤツヤで、真ん丸で、かたくて、オーロラみたいにやさしうに光っていました。お店の人が直径を計ってくれて七・二ミリでした。それは私のとっておきの宝物になりました。

やっと一つ手に入った宝物、かわいくてかわいくて、真珠の事をもっと知りたくなりしました。

ある日、すまうら漁港で真珠の取り出し体けんがある事を知りました。ただし抽選でした。もちろんおねだりしました。私とお母さんは大当たり、お父さんは大はずれでした。

すまうら漁港に着くとすまうら水産という所がありました。まず外で真珠を四こ取り出しました。前回より大へんでした。開けようとするとはいこうして

「ガチャ。」

ツとすごい力で口を閉めてしまうからです。細い糸だけど全ぜん切れない糸がからからたくさん生えていてナイフにからまってますます開けられません。その後その糸の名前は足糸で岩場や仲間とくっつくための物という事を教えてもらいました。そしてなんとか開けて出て来た真珠は、色が全部ちがって、青っぽい白やピンクっぽい白がありました。大きさもちがいました。形は全部真ん丸でした。ほかにケシ

パールを出した人もいました。ケシパールとは小さくて丸くない真珠の事です。外れた人もいます。開けたら真珠が入っていないくてとてもガツカリしていました。

次に、部屋で真珠を育てる方法を教えてもらいました。さい初に貝の中にかくを入れます。かくとは真珠の形の元になる物です。なぜみんな形が同じなのかが分かりました。丸い形のかくを入れていたからです。真珠を育てるのに一番大事な事は貝を死なせない事だということです。だからかくを入れる時むりやり貝をこじ開けたり、かくをつつこんだりしてはいけません。貝が死んでしまいます。むりやり貝を開けない方法があります。その名前は栓差しです。まず貝を休ませて口を開けるのを待ちます。いびきをかいてねているおじいちゃんのおみたいな様子でした。これをおじいちゃんに言ったら

「ゴラー！」

とおこられるかもしれません。口が開いたすきに、つつぱりぼうのような栓をすばやくさつと差しこみます。その時にも気をつける事があります。それは貝柱をいためないようにする事です。差しこむ場所を気をつける事です。口が開いた時にかくを入れます。死なせないための方法は真珠ぶくろに入れる事です。真珠ぶくろはかくを入れても死なない所だけに内ぞうにすぐく近いから入れすぎたり、内ぞうをさわってしまったりしたら死んでしまいます。もう一つ大事な事があります。それは

かくと一しよに外とうまくも入れる事です。なぜかという、外とうまくを入れな  
いと貝がいやがつて、かくを

「ペツペ。」

とはき出してしまふ事があるからです。かくと外とうまくをピンセットで入れるの  
は、手じゆつみたいです。それが終わると二週間安せいにさせます。二週間の入い  
んみたいだと思ひました。私はふと気になりました。

「私がさつき開けた貝は生きてたの？」  
聞いてみました。

「生きてたよ。」

生きていたっていうことは、私が貝のふたを開けて貝の体をぐちやぐちやにしてし  
まったから死んじやったって事かも。

「ガン。」

私がかつくり悲しい気持ちになりました。

「貝をころしちやった。」

私は聞きました。

「ころさず真珠を取り出す方法はないんですか？」

「それはできないんです。」

と言われました。

「ちーーーーん。」

ということはもしネックレスに真珠が五十こ使われていたら、貝が五十ぴき死んでいるということなのです。

それからおべん当をもらいました。中みはあこや貝のちらしずしでした。真珠を取って死んでしまった貝を出来るだけ色んな事に工夫をして使っているんだなと思いました。あこや貝は食感がコリコリしておいしかったです。でもやっぱり私はころさずに取り出す方法を作りたいです。たとえば、真珠ぶくろにかくを入れる時のぎやくをするように、そつと取り出す方法とか出来ないかなあ。もし出来たら、あこや貝も少しはいたいかもしいけど、死ぬことはなくなると思います。

食べ終わった後、はん売会がありました。ほしかった真珠のネックレスを買ってもらいました。色は青っぽい白でツヤツヤでキラキラしていて真ん丸で、銀の葉っぱのかざりがついていて木の実の形です。

三年生からの一番の宝物は、この真珠のネックレスになりました。大事にしまって大事に使おうと思います。大人になったら子どもにやっぱり見せびらかしたくなりました。

しんじゅとだたい みせ  
真珠取り出し体けんしたお店  
しんじゅこう  
真珠工ぼう MOMOKOBE

ねん がつ にち  
2023年12月23日

だいいっかい はま たい ばいらい か  
第一回 Kobe SUMAPEARL 浜あげ体けん・はん完会にさん加

すながた  
砂方海水浴場と  
かすいよくじょう  
はやしきぎ  
まつえ  
林崎松江海岸のちがい  
かいがん

あかしりつはなぞのしょうがっこうごねん  
明石市立花園小学校 五年  
なかむら  
中村 幸太朗  
こうたろう

ここは、日本海に面する京都府京丹後市丹後町間人の砂方海水浴場。僕は二〇二三年の八月にこの砂方海水浴場に旅行に行った。海を見たときの第一印象は「きれい」だった。すき通っていた。初めて見た水平線に感動した。林崎松江海岸ならば淡路島などがあった見えない水平線や日の入りが見られて、とても感めいを受けた。果てしなく

どこまでも海が続いていて気持ちよかった。二泊三日したのだが、一日目と二日目は怖くて、もぐったり沖合の方に行かなかつたりしたが、三日目は海が素晴らしく、沖合の方にもいっぱい行き素もぐりにも挑戦した。母と妹が素もぐりを目の前で何回もしていたのがまんが出来なくなった。何もかもが珍しく初めての光景にむねをおどらせた。本当に最高の海だ。

今回は、この日本海の砂方海水浴場と瀬戸内海の林崎松江海岸にすんでいる生き物や地形などを比べて、環境や生態系など様々なちがいを見つけていこう。比べる理由は、毎年の夏、当たり前のように時間があれば行っている地元的林崎松江海岸と、砂方海水浴場がどちらもすてきな海だからだ。それではレッツゴー。

最初に着目するのは、「地形」だ。

まずは、砂方海水浴場の海。服そうは、ラッシュガードにスイムレギンス。さらに、ライフジャケットにマリッシューズと手袋もつけた。林崎松江海岸ならば、ラッシュガードとスイムレギンスだけだ。しかし今回つけた理由には地形が大きく関係している。浅瀬の方は、ごつごつとした岩が多い。だから手を傷ついたり足を傷ついたりしないようにするためにつけたのだ。けがをせず、安全に楽しめた。たまに砂地は現れるものの、岩しよのところは七十五メートルほど続いた。岩はだには、海そうがわさわさ生えており、岩にはところどころ穴が空いていた。だんだん水深が深くなっ

ていくにつれ岩がんしょうが少すくなくなつていき、その先さきには砂地すなじが広ひろがつていた。しかし砂地すなじは五十メートルほどしか広ひろがつていない。なぜ、砂方海水浴場の海うみは砂地すなじが岩がんしょうの三分さんぶんの二にほどしか広ひろがつていないのだらうか。

調べてみると、砂方海水浴場と岩石海岸がんせきかいがんの特とくちようが似にていた。岩石海岸がんせきかいがんとは、『山地や丘陵さんちきゅうりゅう、台地だいちが海うみまでせまつているところに見みられ、岩いわがら出しゅつ』しているところだそうだ。だから、あんなにゴツゴツとした岩がんしょうがあつたのだと僕は考かんがえる。

一方いっぽうの林崎松江海岸はやしきまつえかいがんは、ほとんどが砂地すなじだ。他ほかには、突堤とつていの周まわりに海かいそうがいつぱい生はえており、そこに小魚こさかなが多数集あつまる。でも、突堤とつていを除のぞくと見みる限り砂地すなじが広ひろがつている。なぜこのような地形ちけいなのだらうか。

調べてみると、林崎松江海岸と砂浜海岸すなはまかいがんのとくちようがほぼいつちしていた。砂浜海岸すなはまかいがんとは、『海岸かいがんに沿そって流ながれる沿岸流えんがんりゅうによって、海底かいていの砂すなが海岸かいがんに打ち上げられたり、河川かせんから運はこばれてくる土砂どしゃがたい積せきしたりして出来た海岸』のことを言いうそうだ。どおりで、砂すなが多おほかつたわけだ。

次に着目ちやくもくするのは「すんでいる生き物いのものと環境かんきやう」だ。

まず、砂方海水浴場の海うみ。浅あさいところには岩いわや海かいそうが多い。海かいそうは、僕ぼくを引き止とめるかのようにからみつてきた。小魚こさかながかくれる場所ばしょが無数むすうにあり、岩いわのすき間まにはかわいい小魚こさかなや大型魚おほがたぎまがいつぱいすんでいた。小魚こさかなが岩いわにいて「ここは僕ぼくの岩いわだ」

と言わんばかりに、穴から顔を出して周りをうかがっているところがとてもかわいかった。また、海そうについているアメフラシやシロウミウシなどもいた。近くで見たくて何回ももぐった。素もぐりでもぐるから、短い時間だが近くで見られたのでうれしかった。さらに、おびただしい数のマアジの大群やアオリイカの子供の群れもいた。とてもきれいで、神秘的な光景だった。二十三センチメートルぐらいの美味しそうなサイズのマアジだった。林崎松江海岸ではあまり見ないアオリイカを、いっぱい見られて思わず息を呑んだ。ずつといっしょに居たくて横に並んで泳いでいた。その光景は、いつまでも見ていられた。また、ヨウジウオの子供の大群など様々な種類の魚もいた。砂地のところになると、クサフグやヒラメなどの砂にかくれる魚がいた。他にもインダイのち魚やカワハギ、カサゴや真鯛のち魚など、本当に多様な種類の魚がいた。初めてみる魚とけたちがいの数の多さに圧とうされた。幸せな時間だった。水のとつ明度は海底がはつきり見えるほどすき通っていた。ということはプランクトンやエサが少ないのであるか。では、なぜこんなに多種多様な生物がすんでいるのだろうか。いやいやよく考えたら、海そうがうじゃうじゃあったのだから、海そうを食べる小魚がいて、その小魚を食べる大型魚がいる。そうやって生態系が成り立っていると、いうことだろう。ではその海そうは、どのような条件で育っているのだろうか。京都府立海洋センターの資料の写真と見比べてみると、砂方海水浴場の海に生えていた海

そうは、ホンダワラという海そうだとすい測できる。それによると、ホンダワラ類は『大きな岩や岩ばんなどの「安定した基質」が必要』だそうだ。ということは、砂方海水浴場の、浅瀬の岩しようがいっぱいある地形はホンダワラ類の生育条件に当てはまっているのだ。つまり、砂方海水浴場の海の生態系は地形と大きくつながっているのだというのが僕の考えだ。

砂方海水浴場の海について言えることは、多種多様な生き物がすんでいて、それぞれ環境にあった場所やくらし方をしている。また生態系と地形は大きく関係している、ということだ。

一方の林崎松江海岸は、海そうが生えているところがほぼ無く、どちらかと言うと砂にかくれる魚が多い。だから、マゴチやカレイ、ヒラメなどが多い。この魚のかくれ方が上手すぎて砂から出てきた時はおどろいた。砂が無い上がつて、まるでにん者ようだった。また、突堤の周りには小魚もたくさんいた。海そうが至る所に生えておりかくれる場所がいくらでもあった。そのすき間から、小魚が顔を出しているところがあるとも言えないかわいさだった。さらに、沖合の方からチヌやスズキ、ボラなどが出入りしていた。その出入りしている魚がこれまた美味しそうなサイズのものばかりだった。また、タイのち魚や、キスなどもいた。水は少しにごっていた。海底がうっすら見えるぐらいのとう明度だった。なぜこのような水なのだろうか。僕が考え

理由は二つある。一つ目は人がいつぱいいいたから、砂が舞い上げられてにごつてしまったのだらうと思う。実際、人がいない時はとてもとう明な海だ。二つ目は栄養が豊富だからではないかと考えた。栄養が豊富だとうつすらにごつて見える。だからにごつて見えたのではないかと考えた。

林崎松江海岸の海に言えることは、栄養豊富で、海そうが生えている所や砂地など様々な環境に合わせて生き物がすんでいたり、大型魚が沖合と浅瀬を行き来したりしているということだ。

次に着目するのは「水温」だ。

魚は変温動物だと言うことをふまえて考えていこう。さらに、この時は八月だというのを覚えておいてほしい。

まずは、砂方海水浴場の海だ。正確な温度はわからない。だが体感温度では、浅瀬は温かい水のような温度だった。しかし、沖合になるにつれ、だいぶひんやりとした温度の海水になっていった。また、表面の海水の方が温かく、水深が深くなるにつれ冷たくなっていった。なぜ浅瀬の方が温かい水のような温度で、沖合の方は温度が低いのだらうか。僕はこう考えた。浅瀬の方が水深は僕のひざほどの深さだった。だから太陽の光が海底まで早く行きわたるから、浅瀬の方は温かい水のような温度なのだと考えた。ということは魚の活動はにぶくなるのだらうか。確かに浅瀬の方では魚は

なかなか見つからなかつた。今度は沖合だ。沖合の方の水深は深い所でだいたい僕が十人ほどの深さだった。これだけ水深が深いと太陽の光が海底まで行きわたらない。しかし海面は温まり続ける。だから、両極端に海面は温度が高く、深いところでは水温が低い。だが、海面の温かい海水と深いところの冷たい海水が混ざって、魚にとつてのいいぐらいの温度になっているのではないかと僕は考えた。だから海底と真ん中ら辺には魚がメチャクチャいたわけだ。魚のいた場所を見ると改めて魚が変温動物だということがよく分かる。また、砂方海水浴場の海の波はおだやかで沖合の冷たい水を運んでこないから、浅瀬の水は温かいのだろう。ではなぜ砂方海水浴場は波がおだやかなのだろう。沖合を観察してみると船がなかなか通らない。僕が考えるには、波が大きくなる理由の一つに船がふくまれていると考えている。だから砂方海水浴場の海の波は小さいと考えた。

次は林崎松江海岸だ。林崎松江海岸の海は全体的に冷たかった。確かに浅瀬にも多くの魚が見られた。しかし、砂方海水浴場の海と同じで、海面の方が温かく水深が深くなるにつれ、温度が低くなっていた。なぜ林崎松江海岸の海は全体的に冷たいのだろうか。僕が考える理由は二つある。一つ目は波が強く沖合の冷たい海水を運んでくるから温かくならないのだろうと考えた。二つ目は海の流れ、いわゆる海流の関係だ。浮き輪に乗っているとだんだん流されていった。だからいつも海水がじゅん

かんして温あたたかくならないのだろうと考かんえた。  
どちらの海うみも僕ぼくが知しっている海うみの中でとてもきれいで最高さいこうの海うみだ。どちらの海うみにも  
まだまだ良い点てんがあるから、調しらべていきたい。僕ぼくのまだ知しらない海岸かいがんはいつばいある。  
だから行いってみたい。未知みちなる海うみへ。

しゅってんにほん しぜん ひと  
出展：日本の自然と人びとのくらし  
だい かんうみ いわさきしよてん  
第4巻『海のくらし』岩崎書店

きょうとふりつ かいよう きほうだいごう  
京都府立海洋センター季報第96号  
るい ぞうしよく きょうとふ  
「ホンダワラ類の増殖」一京都府

<https://www.pref.kyoto.jp/kaiyo/documents/1240388436424.pdf>

# 世界中の海がきれいになる未来

おおさかしりつながよししょうがっこうごねん  
大阪市立長吉小学校 五年

今村 翔有

ぼくは、今年のお正月に沖縄県の石垣島に行った。そこで不思議な体験をした。自分のこれからについて考えることができた四日間だった。

森の中にある不思議な宿に泊まった。その宿は寝る所以外は、全て外にある。宿に着いた時、小学四年生の男の子がぼく達のことを出迎えてくれた。その男の子は、太陽の光をさえぎる程の大きな木がたくさんあるところへ連れて行ってくれた。そこは、秘密基地みたいな所だった。見たこともない木の種類がたくさんあつ

た。横に太く力強くのびている木もあった。

宿のすぐ裏には、海があるけれど、保護されている場所なので、魚を釣ることができないと聞いた。だから、ぼく達は、車で二十分ぐらい離れた漁港で釣りをすることにした。漁港に近づくと、ちよつとしよっぱい感じのにおいが風に乗ってやってきた。漁港では、お兄さんが釣りをしていた。お兄さんは、ナンヨウツバメウオという大きな魚を釣り上げた。熱帯魚みたいに幅広で、今まで見たことのない魚の種類だった。大きな魚を見て驚いているぼくに、お兄さんは、「この魚は、こどもの時は枯れ葉に擬態してひらひらと水面を泳いで身を守りながら生きるんだよ。おもしろい魚でしょ。」

とにっこりとほほ笑みながら教えてくれた。昆虫の擬態は、学校で勉強した事があつたけど、魚も海の中で、身を守りながら生きていくのに一生懸命なんだなあと思つた。その後、ぼく達は色が赤い魚や目がまん丸な魚、何かに擬態しているようなヒレがギザギザしている魚などいろんな種類の魚を釣つた。もつと釣りをしたかつたけど、日が沈むと、帰り道が真っ暗になるので、六時ぐらいに帰る事にした。

宿に戻ると、もう男の子は家に帰っていないなかつた。キッチンに入つて、まず魚のうろこを取つて、小さい魚と大きい魚に分けた。小さい魚はお母さんが素揚げ

にしてくるので頭を切った。大きい魚は、お刺身にして食べることができように三枚におろした。釣りをした時は、いつもぼくが魚をさばいている。ぼくは釣りよりもさばく方がうまいのかもしれない。そしていよいよ夕食の時間になった。テーブルは庭にあるので、料理を外に運んでみんなで食べた。食べ始めてすぐに、穏やかだった庭の空気が突然緊張感でピリツとした。周りの木々達がぼく達をにらみつけるように監視し始めた感じがした。この重たく冷たい空気は、ぼく達のことを木々達に認めてもらえらるまで続くだろうと思つた。勇気を出してその話を家族に話すと弟も同じように感じていた。ぼく達は、木々達に、「ぼく達は、自然を壊しに来たのではありません。ぼく達はあなた達と友達になりたいのです。仲良くなつてくれますか。」と伝えた。すると、ぼく達のことを受け入れてくれたのか、庭の空気が、やさしくあなたかく見守つてくれているような感じに変わった。怖がつているぼく達を心配に思つたのかお母さんが、「ここに來た時、オーナーさんが、石垣島には水の神様がいて、ここにも水の神様の水が流れてきていると言っておられたけど、明日、水の神様にごあいさつに行つてみようか。」と言つてくれた。

次の日、オーナーさんに水の神様の場所を教えてもらって、ごあいさつに行つた。水の神様は岩の姿をされていて、川の前にまつられていた。水の神様の周りは、川の流れる音だけが聞こえる不思議な場所だった。ぼくは、ごあいさつをした後、川の水を両手ですくって一口飲んでみた。その水はあまくてやさしい味かして、疲れているぼくからだに一気にしみわたった。なんだか元気がわいてきて不思議な感覚に包まれた。その日の夜は、昨日とは違い、木々達からの冷たい視線は全く感じなかった。

三日目は、裏のビーチにシュノーケルに行った。海の中は、キラキラとしたエメラルドの中を泳いでいるように輝いていた。カラフルな魚たちが楽しそうに泳いでいるのもみることができた。海から上がると、白くなったサンゴや貝がら、白い砂に囲まれたビーチがどこまでもどこまでも続いていた。ビーチを歩いていくと、所々にペットボトルのゴミが流れ着いていて、悲しい気持ちになった。ぼくは海に、

「ぼく達人間が、君たちを傷付けているね。ごめんね。」と語った。不思議とぼくの眼から涙があふれてきた。

四日目、近くにきれいな滝があると教えてもらったので、行くことにした。滝も森の中にあつたので、入り口を見つけるのに二、三分かかった。滝の水は、冷

たくてちよつとあまかった。ぼくは、ダダダダダダーと力強く流れる滝の中で、滝打ち修行をしたり、ロープにぶら下がって遊んだりした。帰る時に、山から下りてきたおじさんに会った。

「上の方の川には、ハゼやエビがたくさん泳いでいるよ。ハゼは川から海に出た後、もう一度川を上って、自分が生まれた場所に戻っていくんだよ。」

と教えてくれた。偶然出会ったおじさんは、動植物の研究をしている有名な先生だった。

「自然のみんなは、お互いに助け合っていて植物と動物は仲間なんだよ。」と教えてくれた。『森』『川』『海』ぼくは今まで全く違うもののように思っていたけど、みんな自然の仲間で、つながり、助け合い、生き物の命を守っているのだと思つた。

「お昼ご飯を食べた後、オーナーさんに、海から流木をとつてきて。」

と、たのまれた。ぼくは、ザブーンザブーンと海に流れていた大きな流木を宿を持ち帰った。オーナーさんは、カウンターを作っていた。ぼくは、いろんな工具の使い方を教えてもらつてお手伝いをした。ぼくがカウンター作りをしている間、お母さんと弟は、

「お兄ちゃんにいの分ぶんもゴミごみを拾ひろってくるね。」  
と言いって、ビーチクリンビーチクリンに出でかけた。お母かあさんと弟おとうとがゴミ拾ひろいをしていると、ビーチに遊あそびに来てきいた人も参加さんかしてくれて、みんなでおしゃべりをしながら、ゴミ拾ひろいをしたそうさうだ。楽たのしく拾ひろっていたら、あつという間まにゴミ袋ぶくろ四個よんこ分ぶんも集あつまったそうさうだ。

カウンターも完成かんせいし、ゴミもたくさん拾ひろったところで、空港くうこうに向むかう時間じかんになつてしまった。空港くうこうに向むかう車くるまの中で、

(水の神様みづのかみさまは、一体いったいぼくに何なにを伝つたえたかかつたのだららう…)  
と考かんがえていた。

(豊ゆたかな海うみを守まもってほほしい。大切たいせつにしてほほしい。)  
と伝つたえたかかつたのかかなと思おもった。

ぼくは、生き物ものがたくさん住すんでいる海うみが好きだ。だから、海うみの生き物ものを守まもりたいと思おもいで、月つきに一回いっかいはボランティアボランティアさんと海うみの中なかのそうじをしたり、淀川よどがわや海岸かいがんのゴミ拾ひろいをしたりしている。この四日間よっかかん、大自然だいしぜんの神秘しんぴに触ふれ、より一層いっそう自然しぜんが素晴すばらしいものであることを強つよく感かんじた。

ぼくは、もつともつと海うみをきれいにする活動かつどうに参加さんかしようと思おもう。そして、海うみの様子ようすをまだ知しらない人ひとに、人間にんげんが出だしたゴミで海うみが悲かなしんしんでることを伝つたえてい

きたい。世界中のみんなが協力し合ったら、世界中の海からゴミが無くなると思う。  
世界中の海も川も森も生き物も、そして、ぼく達人間も：みんなみんなつながっ  
ているんだ。ぼくは決してあきらめたりなんかしない。自然と人間が、お互いに  
助け合い、ニコニコし合えるあたたかい未来を、ぼく達の手で築きあげるんだ。

# とりかたいろいろ

おおさかしりつほんなんしょうがつこう いちねん  
大阪市立阪南小学校一年

たてやま  
立山 怜佳  
れいか

ある日、おかあさんが、

「さかなをとりに行くよ。」

といいました。いつもはあわじしまのおばあちゃんのいえにいったときに、たまにおばさんといとこがつれていってくれます。

「こんどは大きかでおお

いっていました。わたしは、つりざおにさかながかかったときに、さかなのぴく

びくを手でかんじるのがとてもすきです。どんなさかながつれるのかなとおもってわくわくするので、さかなつりがすきです。さかなをとりに行くときいて、とてもたのしみになりました。

六月、おじいちゃんが車でむかえにきてくれました。おじいちゃんとおばあちゃんとおかあさんとわたしとおとうとで、さかなをとりにいきました。いっぱいっぱい車にのって、大さかのはんなんしというところにあるみなとにやとつきました。

みなとにつくと、なぜかおかあさんが水ぎとマリンシューズにきがえてときました。わたしは『なんで？』ってびっくりしました。いつもはさおとつりばりとうえさでするのになにかがうのです。

きがえおわるとりょうしさんがきて、おじいちゃんとおばあちゃんに、むねまであるながぐつをもってきました。そこでわたしは、『あれ??』っておもいました。いつものさかなつりとはいろいろとちがいました。

また、りょうしさんがたもあみというものをもってきてくれました。りょうしさんについていくと、はまべにつきました。すなのところをあるいていくと、うみの中にぼうがささってあって、あいだにあみがついていました。すなのところからうみに入るとおなかのところまで水がありました。水につかりながらジャバジャバと

あみまでわくわくしながらあるいていきました。するとおかあさんが、

「すだてりようだよ。あみの中にさかながいるよ。」

とおしえてくれました。そこでやっと、たもあみでさかなをとるということがわかりました。すだてのあみはまるが二つくつついているようなかたちでした。大きいあみの中に入ると、りようしさんが、

「たもあみでさかなをすくつてね。」

といいました。さいしよは、水がすこしにごつたので、さかなが見えませんでした。りようしさんが、

「あみぞいにいるからね。」

とおしえてくれました。でもぜんぜん見つかりません。そうしていると、おじいちゃんが「ばんにいしだいやあじやべらをいっきに三びきとりました。」

おじいちゃんにきくと、

「キラッとしているよ。」

とおしえてくれました。わたしも『とりたい!!』とおもいました。

がんばって、じっとじっとあみを見つづけました。そうするとキラキラしたものが見えてきました。

『えい。』つとたもあみを入れると、スイスイとすばしっこくにげていきます。さか

なのおよぐのがはやくてぜんぜんとれません。水ぞくかんで見たことはありますがほんとうにじぶんの目で見るとさかなのおよぐスピードのはやいことにびっくりしました。なんかいもなんかいもすだてのあみのちかくでチャレンジをしましたが、そのたびに足もとをすいっとにげていつてなかなかとれません。

でも、さかなはすぐはやくにげるけど、すだてのあみの中からはにげないで、ずつとすだてのあみぞいのにげるのをふしぎにおもいました。

なんかいもがんばったけどとれないので、りょうしさんがさらにあみでさかなをおいこんでくれました。りょうしさんとタイミングをあわせてさかなのにげるほうにたもあみをいれました。そうするといちばんおおきたいがとれました。すぐおもたくて、いっばいうごいてにげようとするのをにがさないようにするのがたいへんでした。とつたたいは、とてもいきがよくて、うろこが一つ一ついろいろがちがつて見えてとてもきれかったです。また、目のいろいろいろに見えておもしろかったです。

そのあと水があさくなってきました。とても見やすくなったけど、あじのおよぐのがはやくていっばいいてるのになかなかとれません。べらのほうがとれやすかったです。

あみでとるのはなんとかできましたが、とつたさかなをつかまえてかごに入れる

のがちよつとこわくておばあちゃんにおねがいました。生きているさかなをちかくで見ると、ひれがとってもとんがっていてささりそうでこわかったです。さいごの一びきのあじはわたしがとりました。

わたしのかおより大きいやがしら、あじ、めばる、べら、いしだいなどいたい二十びきとれました。おうちにかえると、おかあさんがさばいておさしみにしてくれました。生まれてはじめてたべたおさしみは、わたしがとったたいでした。たいのあじは、ぶるんぶるんであまくておいしくてほっぺがおちそうでした。ほかにもあじだからあげをしてくれました。とってもとってもおいしかったです。マヨネーズをつけるのがおすすめです。

そのあと、おかあさんにすだてりようについて、うみの水がふえたりへったりすることをつかって、さかながにげないかたちですだてあみをたててさかなをとるのだとおしえてもらいました。つりやふねでさかなをとるのはしっていただけ、すだてのあみでかこいこんでとるやりかたがあるなんてはじめてしりました。とってもたのしくておいしかったすだてりようでした。またいきたいです。おとうもがんばっていました。ごはんがとてもおいしかったです。

# おじいちゃんと海とわたし

あさかりつあさかだいじゅうしょうがっこうさんねん  
朝霞市立朝霞第十小学校三年

ひろやま

弘山 紗菜

「海」と聞いて何を連想しますか？ 広い、青い、深い、それから、魚や船。色々ありますが、わたしがまず思いうかべるのはおじいちゃんです。

わたしが住んでいる埼玉県には海がありません。わたしがお腹の中にいた時は長崎県の、しかも海沿いの町に住んでいたのに、わたしはずっと海を見たことがありませんでした。幼稚園の時に海が見たいと言ったら、兵庫に住むおじいちゃんが、「次に帰省してきたら明石海きょう大橋渡ろかー。」と約束してくれました。海を見

られるどころか、海を渡れると聞いてワクワクしました。

ところが、あの新型コロナウイルスが日本で大流行してしまったのです。海にも行けなくなつたし、何よりもおじいちゃんにもおばあちゃんにも会えなくなつてしまいました。

県をまたいでの帰省はとてもいやがられている時期がありました。とくに関東から田舎への帰省は、あまりかんげいされておらず、わたしはずつとがまんしていました。兵庫県は遠すぎました。おじいちゃんもわたしも元気がなくなつて、休みがあつても楽しくないつまらない日々でした。

相変わらず日本中がえんりよがちに帰省したり遠出をしていたころ、おじいちゃんの家近所ではまだまだ帰省反対の人が多かったので、まったくえんもゆかりもないけど、おじいちゃんがギリギリ車で出てこちからもがんばつたら車で行ける三重県で久しぶりにさい会しました。おじいちゃんはちよつと太つていました。わたしも外に出ることがへつたからかちよつと太つていました。「太つたな！」と笑い合いました。

お母さんが地理もよく分からず、おいしそうな料理にひかれてえらんでくれた旅館は、海沿いになりました。浜に自由に出られるというので、12月だから寒かつたけど、おじいちゃんと浜辺に行きました。砂浜にラクガキしたり、引いていく波

を追いかけたりして遊びました。海はぜんぜん青くなくて、灰色で寒かったけど、最高に楽しかったです。お母さんがおこつてよびにくるまで、おじいちゃんと遊びました。

今回の帰省中に、ついに明石海きょう大橋を渡れそうです。広くて青い、たくさん  
の船が行き来する海を、おじいちゃんと見るのが楽しみです。

# おろし売り市場ってどんな場所？

いたみしりつおぎのしょうがつこうよねん  
伊丹市立荻野小学校 四年

きもと  
木元孝亮

毎年春になると、神戸のおばあちゃんがイカナゴのくぎ煮を作ってくれます。  
おつまみとして、そのまま食べても美味しいですが、特にごはんにませて食べるのが好きです。おばあちゃんがイカナゴは兵庫県の海でとれる魚だと言っています。兵庫県のせとない海でとれる魚はイカナゴの他に、シラス、マダイ、タコ類、イカ類。日本海でとれる魚はベニズワイガニ、ハタハタ、ホタルイカなど、たくさんあることも教えてくれました。海でとれた魚が、どうやってスーパーなどに来て、

おうちで食べられるようになるのか知りたくなりました。魚をはじめ、野さい・くだ物などの食ざいが集まる場所があると聞いて小学四年の夏休みに明石市公せつ地方おろし売り市場に見学に行きました。

せりを見学するために早朝三時に起きました。外はまだ真つ暗でした。朝四時半ごろになると、せりが始まりました。すずをふった人が合図をすると、4ケタのお店の番号が書いてあるプレートをつけた帽子をかぶった人たちが、集まってきました。市場ではたらく人たちの服装には、役割ごとに決まりがあることを仲おろし業者さんに教えてもらいました。

せりが始まる前から、買い付けの人たちは、地面に並んでいる活きた魚を近くで見たり、さわったりして、買う魚をえらんでいました。せり人とよばれる魚を売りにかけるおろし業者の人が、それぞれの魚の大きさや数などを小さな黒板に書いて、売っていました。

せり人は少しでも高く売りたいし、売れ残ったらこまるから、しんけんです。買い付けの人は、その日の一番いい魚を安く買いたい。みんな早口で、わずかな時間で魚がつぎつぎと引きさされていくことにおどろきました。

せりが終わると、魚は市場の中にある仲おろし業者のお店へ運ばれて行きます。市場の中には魚などの仲おろし業者のほかに野さい・果ものの仲おろし業者のお

店や、おとうふ屋、ウナギを焼いているお店、かん物屋さんもありました。ぜん  
国から新せんな食ざいが明石公せつ市場に集まり、スーパーやいん食店、ホテル、  
学校の給食を作る会社におろされます。市場ではふだん、スーパーではおいていな  
いめずらしい食材も手に入ると、市場の人に教えてもらいました。

マグロの解体が見学できるということで、マグロの仲おろし売りのお店に行きま  
した。マグロといっても、本マグロ、インドマグロ、キハダマグロといろいろな  
種類があり、天ねん物、養しよく物、冷とうなどで、ねだんが違うとお店の人が  
言っていました。マグロの解体は、大きなほうちょうで、すばやく切り落としていき、  
あつという間にスーパで見えるお刺身になったのでおどろきました。

海でとれた魚が、いろいろな人を通じて、おろし売り市場に集まり、おうちで食  
べられるようになることを知り勉強になりました。

# はじめての魚さばき

ふなばしりつたきのいしょうがこうさんねん  
船橋市立田喜野井小学校三年

たなか

田中 佑築

2023年8月に千葉県で家族と地引網をしました。地引網に参加したのは全部で約600人ぐらいで、僕が参加したチームは約200人です。初めての地引網だったので、どんな魚がとれるかが楽しみで、40センチぐらいの大きな魚が取れたらいいなと思っていました。地引網を引くときはたくさんの方がいたからか、思ったよりも軽く感じました。みんなで声を合わせて

「よっこらせー」

と網を引っ張り張りました。地引網を引いていた時間は約30分で、親が

「もうそろそろだ」

と言ったので、早く40センチぐらいの魚を見たいと思つて僕はグッと、力を込めて網を引つ張りました。そして砂浜に上がつてきた網に向かつて走り出しました。網にかかつていた魚は予想よりも小さい魚が多かったです。

「取れた魚の中には毒がある奴もいるから近づくな」と言われました。

とつた魚をみんなに分けている時に、僕は網から逃げた魚を追いかけていました。5匹つかまえることができ、その1匹はこれまでに見たことがない珍しい魚でした。表面がザラザラで赤と紫に近く、目の位置が面白かったです。この魚を携帯で調べてみると、舌平目という魚でした。このほか、地引網でとれた魚を9匹もらいました。ほとんどがイワシやアジでした。

家に帰ってきて、僕とお母さんで魚をさばくことになりました。

最初はアジです。お母さんからゼイゴの取り方を教えてもらいました。そして僕が包丁で腹を切り、お母さんが内ぞうをとるかかりです。お腹をさいて内ぞうを取ろうとしたけど取りにくかったので、取りやすくする方法をお母さんと一緒にチューブで調べました。チューブではエラの中を包丁でさして、内臓とつながっているところを切つて、内臓をとる方法を教えていたのでその通りにしました。そ

うしたら内ぞうは取りやすくなりました。だけど、途中からエラを包丁でさすのが  
いらなくなりました。アジを切るのにだんだん慣れてきたら、最高3秒でできました。  
次はイワシです。アジと同じように僕が包丁で腹を切り、お母さんが内ぞうをと  
るかかりです。イワシは最高2秒で切ることができました。だけど104匹さばく  
のに1時間半かかりました。

最後は、網から外れて僕がひろった舌平目です。僕は舌平目を調理する時に、ま  
ず両面に塩を振り、あつい皮をむきました。この時に舌平目の皮が固くてはがしづ  
らかったのでお兄ちゃんに手伝ってもらわないとはがせなかつたです。厚い皮をむ  
くと白い身が出てきます。身を焼いて、焼き終わった後にまた塩を振って完成です。  
僕は舌平目を食べる前はイカに近い味がするものだと思っていました。でも食べ  
たら、イカとイワシの塩焼きの間の間のような味がしました。

今回の地引網ではたくさん魚をもらったので、食べ終わるのに一週間ちよつと  
かかりました。

初めての地引網体験でしたが、思っていたより小さい魚ばかりでした。そしてこ  
の日、僕は初めて舌平目を捕まえました。

もらった魚は自分でさばいて料理して家族で一緒に食べました。また地引網をやり  
たいです。

# 船の上はどうして酔うの？

山本 椎華

あかしりつたいかんしょうがっこう よねん  
明石市立大観小学校 四年  
やまもと

「気持ち悪い。」

今いるところは、船の上です。とてもグラグラしていて気持ち悪い、いったいどうしてこんなことに……。

私は、船の上ではどうしてこんなに酔うのか気になって仕方なかったのですが、調べてみることにしました。耳鼻咽喉科の北島尚治先生によれば、「体に受けた動揺刺激と予想された刺激との感覚不一致（ずれ）を起こした際に生じる「空間認知

「障害」で起きるようです。私は正直言つて意味が分かりません。なのでどうやって船酔いを克服できるか調べることにしました。残念なことに慣れることが大切だと思います。

けれど私には、まだ疑問があります。酔い止めを三十分ぐらい前から飲んだのにどうして酔つたかです。調べてみるとなにも書いてなく、遠くを見つめる、水分補給をするなどアドバイスのなものしか書いてなくとても残念な気持ちになりました。

次に、外の空気をたくさんすつたり、はいたりしたのに、良くならなかつたかです。調べてみると、書いてなくて残念でしたがこう思います。一回しか乗船していい私でもこんなに酔うのに船の上で働いている人たちを見ると本当にすごいなと船を見るたびに思います。なので私はとてもすごい船酔いなので魚を食べる時はいつも「いただきます。」と言うけれど、これからは心の中で「いただきます。」と「りようしさんありがとうございますおいしくいただけます。」と言いたいなと思えました。

私はもう船にのりたくないと言う気持ちでいっぱいだけれど、せっかく校外学習できちよな乗船をしたのに、ぜんぜん楽しめなかつたからです。なのでモヤモヤがのこってしまったので、もしまた学校や家庭内で、乗船できるようになったら、このたいさくを練つて乗船したいです。





〈選考委員講評〉

せなつこさん講評



# 最相葉月

ノンフィクションライター

1963年東京生まれの神戸育ち。関西学院大学法学部卒業、会社勤務を経てフリー。科学技術と人間、スポーツ、音楽、精神医療、宗教などを取材。『絶対音感』で小学館ノンフィクション大賞、『星新一(100)』話を『くつた人』で大佛次郎賞、講談社ノンフィクション賞などを受賞。他の著作に『青いバラ』『セラピスト』『証し』日本のキリスト者』など。児童書に『調べてみよう、書いてみよう』。

賞というのは、1年1年の積み重ねです。「こども海の文学賞」の2年目も素晴らしい作品が集まり、本当によかったです。文章を書くこと、事実に向き合うことを、真剣に考えて表現してくれたことをうれしく思っています。

小学生の部の最優秀賞には、2作品が選ばれました。ツダさんの「父と海」は、

海をテーマにしながら人間を書いていることが素晴らしく、釣りにいく父と子の姿に余韻が残る秀作です。原稿用紙わずか3ページのなかで父と自分との関係がにじみ出ていて、本人に会ってみたいと思わせてくれる魅力があります。ノンフィクションは堅苦しい印象があるかもしれませんが、こんなふうにも書けるといふひとつの具体例を示してくれています。中林さんの「私の宝物」は、真珠づくりに興味を持ち、自分で手足を動かして、体験したことを書いているからこそ、ワクワクと驚きがつたつたてきまます。「中林風和」でなければ書けないオリジナリティーも表現力もあり、貝に核を入れる場面では「いびきをかいて寝ているおじいちゃん」の口」とのたとえに大笑いさせてもらいました。

優秀賞も特色ある力作が並びました。中村さんの「砂方海水浴場と林崎松江海岸のちがいは、2つの海を比較、分析しており、理知的で科学的なアプローチが印象的です。関心を持ち続け、取材していくことで、もっと深い作品になっていくでしょう。今村さんの「世界中の海がきれいになる未来」は、石垣島で見たり聞いたり感じたりした事実を一生懸命伝えてくれています。森の神様や海の神様に祈るといふ特殊な体験が、自然体で書かれています。立山さんの「とりかたいろいろ」は、魚がすぐそこで泳いでいる光景が目につかび、細かいところまでよく観察しているなと感心しました。初めて自分とつた魚を食べたおいしさが、原稿からにじ

み出ていました。

入賞4作品も読み応えがありました。祖父との交流を通してコロナ禍での自粛生活がありありと感じられたり、卸売市場について丁寧に実直にまとめられていたり、地引網と魚をさばいた体験が生き生きとつづられていたり。船酔いのテーマには「こんな題材があったか」と、着眼点に驚かせてもらいました。

ノンフィクションが大切なのは、私たち大人が読んでも全く知らないことが少くともひとつは書かれていることです。作品を読みながら、そのことをあらためて実感しました。一方で、中学生の部の応募が少なかつたことは寂しく、次回はぜひ多くの方にチャレンジしてもらいたいです。

時間を大切に過ごす、自分が何を知りたいのか、何が疑問なのかが見えてきます。知りたいと思つた事があつたら、メモしてください。メモがいつぱいできて、最後にこれが一番知りたいと思つたら、それをテーマにして書いてみてください。テーマを見つけるのはとても難しいですが、皆さんの日常の中にたくさんあるはず。それを丁寧に探してみてください。来年はどんな海のノンフィクションに出会えるだろうか、意欲作を心待ちにしています。

# たなか しん

画家・絵本作家

絵の下地にアトリエのある明石の海の砂を使い、独特のマチエールを生みだす。海砂は波打ち際の細かい部分を使う。そこには、山から運ばれた岩や砂など大地の恵み、海から運ばれた貝殻や珊瑚などの海の恵みが混ざり合う。採取した海砂は塩を洗い流し、天日に干す。そうすることにより、太陽のエネルギーさえもキャンバスに閉じ込める。画家として活動する傍ら2002年頃から絵本を描き始め台湾の出版社 Green Press から絵本作家としてデビュー。以降、国内外で展覧会、出版を重ねている。『一富士茄子牛焦ルギー』で第53回日本児童文学者協会新人賞受賞。

「こども海の文学賞」は2回目となりました。前回の優秀賞受賞者が最優秀賞に輝くなど、少しずつ積み重ねることによって何かしらの変化が起こり、歴史となっていくます。それはきつと文章も同じで、今までならこれだけしか書けなかったことが、翌年には書けるようになっていたり、違う見方ができるようになっていたり、

言葉や表現方法が増えていたりします。海のノンフィクションを募集している文学賞に幅広いテーマの作品が集まっていることに、明るい未来を感じています。

異例の2作品受賞となった小学生の部の最優秀賞は、異なる良さが味わえます。ソダ君の「父と海」は、短い文章から人柄やその場の雰囲気伝わってきて、興味をひきつけられました。なんてことのない釣りに行く一日の出来事を通して、父親の心の中を、直接的ではないのに細やかな描写で見事に表現。ものすごい才能を感じ、もっと読みたいくなりました。真珠を貝から取り出す体験を書いた中林さんの「私の宝物」は、擬音語などを工夫し、自分の言葉でももしろくなるように考えられていて、読むと笑顔になっていました。貝を思いやる様子から優しさもにじんでいて、すでに作家性が生まれているんじゃないかというくらい中林さんらしい文章でした。

優秀賞は3作品。中村君の「砂方海水浴場と林崎松江海岸のちがいは、参考文献を最後に記し、ノンフィクションとして成立するようにしっかりと調べられています。入賞だった前回に続き、ボリウムのある作品を書き上げたこともすばらしいです。今村君の「世界中の海がきれいになる未来」は、表現が難しい不思議な体験を、自分の言葉を探して書かれています。未知の世界に連れて行ってもらったようで心が弾みました。立山さんの「とりかたいろいろ」では、魚の動きや捕まえる方、食べたときのおいしさや食感など、見たこと感じたことを、丁寧に一生懸命伝

えてくれました。

久々に会ったおじいちゃん和海で過ごした喜びを、光景が浮かぶようにつづった弘山さん。なかなか見る機会のない競りの状況を、よく観察して細かく教えてくれた木元君。初めて魚をさばいた様子を、数や大きさなど数字を使ってわかりやすく説明してくれた田中君。なぜ船酔いするのか、疑問に思ったことの答えを探して解答にたどりつかない過程を楽しく読ませてくれた山本さん。入賞作品いずれも個性があふれていて、楽しませてもらいました。

子どもたちから「書くのは苦手だ、嫌いだ」と聞くことも多いです。それならまず、メモでもなんでもいいので書いてみてください。そこから気になるところをどんどん増やしていけば、いつの間にか文章になっています。そのあと、いろいろな部分は減らしでもいいし、もっと気になることが出てきたら一から新しく書いてもいい。書くことを習慣にすると、こわくなくなりやすい。本をたくさん読んで、興味のあるテーマを見つけて、自分らしく、楽しんで書いてみてください。皆さんの個性が詰まった作品を、次回も楽しみにしています。

あとがき

川崎喜昭

あかし  
明石おさかな普及協議会会長

子どもたちに海や魚に親しんでもらい、文章で表現してほしいと、2022年に「こども海の文学賞」を創設しました。多くの方のご支援やご助言をいただき、第2回は2023年の海の日（7月17日）から募集を開始、小学生101点、中学生6点、計107点の作品が寄せられました。地元の明石市、兵庫県内をはじめ、日本各地、海外は米国からも力作が届き、感謝の気持ちでいっぱいです。

明石おさかな普及協議会は、明石市公設地方卸売市場にある水産の卸業者、仲卸業者で構成されている団体です。おいしい海の幸をたくさん食べてもらいたいと普及、啓発の活動をしており、豊かな海を未来へつなげていかなければならないと

という思いがどんどん強くなっています。こども海の文学賞は、その思いが形になった取り組みです。

前年度に続いて見学会も企画し、明石浦漁業協同組合と卸売市場、兵庫県水産技術センターで実施しました。生きものに触れ、競りの光景をじっくり観察し、関係者の話をメモしながら真剣に聞く様子に、子どもたちの無限の可能性と、伝えることの大切さをあらためて感じました。

今回は小学生の部の最優秀賞に2作品が選ばれました。ツダアキラさんの「父と海」は、明石の海で釣りをする親子が目に浮かび、海が舞台となるノンフィクション作品のおもしろさを教えてくれました。中林風和さんの「私の宝物」は、真珠を取り出す体験が臨場感たっぷりにかかれ、弾む心まで伝わってきて元気をもらいました。

「海」というキーワード1つから発想した幅広いテーマの作品が集まり、子どもたちからたくさんのお気持ちを受け取りました。この作品集には受賞9作品を収めています。ぜひ多くの方々に読んでいただければ幸いです。

最後になりましたが、選考委員、協賛や協力の団体・企業、講座開催や告知などで関わってくださった方々、応募を取りまとめくださった学校関係者はじめ、企画、実施にあたりご尽力いただいたすべての皆様に厚く御礼申し上げます。



だいにかい  
第2回こども海の文学賞作品集

ちちうみ  
父と海  
わたし  
私の宝物

ねんがつにちだいいすりはつこう  
2024年7月1日 第1刷発行

はつ  
発行 明石おさかな普及協議会

ひょうしきしえわくだちひろ  
表紙挿絵 浦田千尋

まとう  
装丁 北原和規 (UMMM)

きょうりよくあかしきぎょうくみあいれんごうかい  
協力 明石市漁業組合連合会

ひょうごげんきぎょうきょうどうくみあいれんごうかい  
兵庫県漁業協同組合連合会

あかしりつしよかん  
明石市立図書館

かぶしがいしや  
株式会社ベニコム

かぶしがいしや  
株式会社ライツ社

うみぶんがくしよほうむへーじ  
こども海の文学賞HP

<https://www.akashi-osakana.org/bungaku/>

ほんしよむだんでんさいふくせいきん  
本書の無断転載・複製を禁じます。